沮んだり反對したりするでせう。けれども僕の宿は橋の傍ですから、時々遊びに來て下さい——

それから僕は又無想庵のところへ行つたのだつた。

勘定を拂つて、頭陀袋一つの荷物を提げて宿の婆さんが、何しに此處にとまるのかとか、不審がつて、親戚はあるかとか厭味を言つたから、僕は踏み切りの傍の寫眞屋へ寄つて、障子の根に坐つたなり、寫眞を二枚撮した。

行くと春子が出て來た。

僕は直ぐ其の騰寫版刷の詩集を彼女に渡した。

彼女は嬉しそうにそれを受けとつてお辭儀をした。

『あなたの生れたのは何處です』

『二宮です』

親しそうに話してゐると久子が出て來たので、僕は『作日のはがき出してくれませんか』と言つて、『無想庵にもう見せなくとも好いですから、春子さんにも半分上げて下さい。あなたにも上げますから』